摘果の目的と時期

摘果は顎（がく）立ちして、結実が確認され次第、早期に始めます。

摘果の目的は、果実肥大の促進と隔年結果を防止し、商品性の高いリンゴを安定して生産することで、摘果の時期や方法により、玉伸びや花芽分化に影響します。果実肥大は摘果が早いほどよく、遅くなるにしたがい、小玉で花芽分化が劣り隔年結果の原因になります。

粗摘果は落花後２５日までに、葉数の多い花叢（そう）の中心花を残します。仕上げ摘果は、６月下旬までに形や生育のよくそろった果実を残しますが、晩霜常襲地では降霜の心配がなくなってから行います。開花期の低温により、「王林」などの中心果が欠落したり果梗（こう）の短小したりした果叢もあるので、果梗が長く肥大のよい側果を残します。

さらに、肥大が劣りやすい「さんさ」や「ふじ」は他品種より早く摘果を行い、遅れた場合は、１～２割着果を少なくするなど、樹勢や時期に合わせて着果量を加減します。摘果作業の効率化を図るため、薬剤摘果（ミクロデナポン水和剤８５　１２００倍）を実施して適期内に終えるようにしましょう。